

頻発する災害に向き合いながら成すべきこと

被災地の皆様に心から、お見舞い申し上げますと共に支援の行動をお約束します。
大阪北部地震・西日本豪雨、立て続けに襲ってくる自然災害で、学校は休校となった。
大きな揺れに恐怖を感じ、交通手段が断たれ不安を感じながら下校した日から間もないところに、今度は、大雨洪水被害が起きました。京都市内を始め、西日本各地に次々に出される避難指示。リアルタイムで被害状況が報道され、被害地域が拡大していく。そのさまを見て、「自然災害がこれほど身近に感じ、同時に恐怖を抱いたのは初めて、その上災害被害の状況に愕然としています。行方不明の方々の発見を願ひ、私たちにできる活動を考えたい。」(高校3年I)「災害報道番組を見るだけで心が痛み、いち早く行方不明の方々が救助されて欲しいと祈り、こんな時だからこそ、被災者の方々に役立ちたい。」(高校3年K)「何かしたい。募金したら役立ててもらえますか。」(中学1年A・H) などさまざまな思いや願いが…。

今できることを

大阪北部地震被災地に対しての支援の一步は…

高槻にある平安女学院大学附属幼稚園の園児 104 名に、心の支援として、パンダの顔にメッセージを書いて届けました。幼児教育進学コースのみなさんご協力ありがとうございました。園長先生からお礼のメールと写真が届いています。



西日本豪雨被災地に対しては…

生徒・保護者で身近なお知り合いで被災された方がいらしたらご連絡下さい。お役にたてることをします。

これからできることを

私たちがやらなければならないことは、どんな災害に直面

したときにも、冷静に「命を守る」行動をとることです。そのために、大阪北部地震後に「防災のためのアンケート」を全校生徒のみなさんにお願ひしました。**アンケートご協力ありがとうございました。**アンケートに書かれていた一部を紹介し、アンケートで出されていた意見を学校に伝えていきます。

- 通常のルートで帰宅できなかった人が多くいました。
- 大地震時の時、どう行動したらいいかわからない人が多いので不安です。
- 他の災害と同様に、大地震当日・翌日の登校について事前に決めておいて欲しい。
- 廊下や教室のロッカーが倒れてくるかと思ったので固定して欲しい。

もっともっと、防災について取り組んでいくことがたくさんあることが見えてきました。

KBS 京都ラジオ「武部宏の日曜トーク」(7月1日放送)

東日本大震災被災地応援実行委員会代表の高校3年生岩岡 侑葵さん 金本 晴華さん、上尾 紗矢さん、今井 千穂さんが出演し、活動の様子などを語りました。その一部をご紹介します。

◆ 6月18日に起こった大阪北部地震についての話題から始まりました。

地震翌日の臨時会議では、震源地に近い所に住居を持つ教職員や、通学している生徒から被害状況を聞き、今後の活動方針を固め、身近な平安女学院大学付属幼稚園(高槻市)の園児にパンダのお見舞いメッセージを送ったり、校内では生徒対象の防災アンケートの作成、実施、集計など生徒が主体的に精力的に行った活動の様子を伝えました。

◆日頃の活動の紹介では、毎月11日の朝に「11円募金活動」を行い、被災地へのクリスマスプレゼントの資金に充て、相手の立場にたって思い思いの品を贈ってきたこと、当初は募金活動も、教職員、生徒といった学院内での活動であったのが、近頃では学校周辺の通勤者からの支援も頂き、活動の輪が大きくなってきていることや、オリジナルグッズの販売活動も盛んで、印象に残るものと言えば、卓上ミラー時計、タオル、バンダナ、ペン、付箋等いろいろあるとのこと。その中でも、印象深いものに、ヒマワリの絵が描かれたタオルが挙げられました。これには、被災地から贈られたヒマワリの種がモチーフとされているエピソードを披露しました。

◆ 司会の武部さんから「防災のこともお勉強されているようですね。」の問いかけには

昨年度、1995年に起こった阪神淡路大震災の様子を学ぶため、神戸市の資料館や野島断層の見学、被災した人たちからの話を伺う活動に併せて、学校の避難地図の見直しや、家具の固定化といった家のなかでの安全についても議題として話をしていた矢先の大阪北部地震であった。だからこそ、自分たちは安全に動けたと思うと発言していました。

◆中学1年生から続けてきた活動を通しての印象を尋ねられると、「年々、東日本、熊本がメディアで取り上げられる機会が少なくなっている。」「復興は進み、支援は十分に済んでいるのではないかと考えている人たちも少なくはない。もっと私たちの活動を必要だということを伝えていきたい。」と答えました。

◆支援の変化については、被災直後には、生活物資を送ってきたが、時が経過する中で、「心の支援」がまだ必要とされていることが分り、「震災の記憶の風化」こそあってはならないと考え活動してきた。

平安女学院に来てはや3カ月が経ちます。彼女たちの活動を見るにつけ、2011年3月に始まった、被災地の人々と心を共にしたいと願った学院の卒業生たちの思いは、年長者から年少者へ、先人から後継者へ、想いの灯火はリレーされているように思えます。彼女たちの純粋な願いが、さらに大きな輪へと広がっていくことを切に祈るばかりです。

実行委員会顧問団 総合科 濱田